

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resources

Title	青年の愛着スタイルと対人態度の関係
Sub Title	Relationships between attachment style and attitude to others in youth
Author	大森, 貴秀(Omori, Takahide) 吉川, 郁子(Yoshikawa, Ikuko) 富安, 芳和(Tomiyasu, Yoshikazu)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1994
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.39 (1994.) ,p.37- 44
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000039-0037

青年の愛着スタイルと対人態度の関係
Relationships between Attachment Style and Attitude
to Others in Youth

大 森 貴 秀*
Takahide Omori

吉 川 郁 子**
Ikuko Yoshikawa

富 安 芳 和***
Yoshikazu Tomiyasu

To examine the relationships between attachment style and attitude to others in youth, two kinds of attitude scale and two kinds of attachment scale were administered to undergraduate students. These attitude scales were intended to examine the attitude to mother and close friend by rating 57 adjectives. One attachment scale was rated by students about their own general attitude to others. Another was rated by mothers of the students about the mother-child relationships when the students had been infants. The results showed that many ratings of adjectives in the attitude scales significantly correlated with attachment style based on the students' ratings and some significantly correlated with attachment style based on the mothers' ratings. This suggests a close relationship between attachment style and attitudes to others and the usefulness of the retrospective attachment style scale rated by mothers.

序 論

乳児と母親との関係についての研究は長年おこなわれてきたが、その中でも Bowlby は、人間は生得的に人間との接近や接触を求める傾向を持っていると考え、乳児が母親との間に形成する絆を「愛着」という概念で捉えた (Bowlby, 1969, 1973, 1980)。愛着は誕生時には存在せず、その後母親との交渉を重ねる中で徐々に獲得されるものだと考えられた。特に Bowlby は、愛着の獲得のされ方を研究するにおいて、母子分離が乳児におよぼす影響を調べることの重要性を指摘した。

乳児の愛着を調べる方法の一つとして、Ainsworth は、ストレンジシチュエーションと呼ばれる実験的な場面を設定した (Ainsworth, Blehar, Waters & Wall, 1978)。そこでは、1 歳児をブレイルームに入れ、8 つの

エピソードからなる 20 分程のスケジュールにしたがって、被験児にとって見知らぬ成人女性 (ストレンジャー) と母親がブレイルームに入ったり出たりし、その間の被験児の行動が観察される。特に注意が向けられたのは、母親と分離された場面と母親と再会した場面での乳児の行動であった。

Ainsworth はこの観察結果をもとに、被験児を 3 群に大きく分類している。A 群は回避・不安定型 (以下、回避型とする) で、母親に自分から接近したり接触したりしようとしないうちに特徴がある。B 群は正常・安定型 (以下、安定型とする) で、母親に自分から接近したり接触し、接触を維持しようとするところに特徴がある。C 群はアンビバレント・不安定型 (以下、アンビバレント型とする) で、母親との接触を拒絶する一方で接近・接触を求める様子も見せ、怒りの表出が多い点に特徴がある。

Ainsworth は同時に、家庭での母子関係も観察し、それぞれの群に特徴的な母親の行動を見出している。回避型の乳児の母親は、非常に拒否的であり、堅い性格で強制的であった。安定型の乳児の母親は、肯定的で応答

* 慶應義塾大学文学部嘱託 (助手) (発達心理学, 発達障害学)

** 慶應義塾大学文学部卒業生 (発達心理学)

*** 慶應義塾大学文学部教授 (発達心理学, 発達障害学)

的であった。アンビバレント型の乳児の母親は、回避・不安定型の乳児の母親ほど強制的ではないが正常・安定型の乳児の母親ほど応答的でなく、肯定的な接触を一貫して与えることができなかった。

Ainsworth によって操作的に明確に定義された標準となる観察手続きがつくられ、そこでの観察にもとづいた乳児の基本的な愛着行動スタイルが示されたことにより、共通の実験手続きから得られた研究間で比較可能なデータを用いて愛着を調べることが可能になった。

このように乳児の愛着行動の研究が盛んにおこなわれる一方で、成人における愛着理論の適用にも関心が向けられてきた。Bowlby (1979) はこの点に関して、愛着理論が子供についてのみでなく、成人とその人の愛着の対象となっている人との関係にも適用できることを指摘している。

愛着理論の成人への適用においては、成人用の面接による愛着分類法や母親への面接から子供との愛着を調べる方法が生み出され、用いられている (Bretherton, 1992)。特に、母親の愛着スタイルと子供の愛着スタイルの関係性を調べることによって、世代間の愛着パターンの伝達を調べようという研究は盛んになされてきた。例えば、Fonagy, Steele and Steele (1991) では、第一子出産直前の女性に Adult Attachment Interview を実施し、子供が1歳になった時点でストレンジシチュエーションを実施して、母親と子供の愛着スタイルを比較した。その結果、安定と不安定の2分類において75%の母親の愛着スタイルが子供の愛着スタイルを予測していたという結果を得ている。

日本においては、青年期の愛着研究はまだあまり見られないが、詫摩、戸田 (1988) は、成人用の愛着スタイル尺度を作成し、青年の対人態度との関係を見ている。彼らは愛着スタイル尺度を用いて被験者ごとに安定型得点、アンビバレント型得点、回避型得点を算出した。さらに、現在の母親と恋人に対するイメージにもとづいて57の形容詞を評定することで対人態度を測定し、愛着スタイル得点と各形容詞の評定との相関を調べた。その結果、安定型得点、アンビバレント型得点、回避型得点すべてが多くの形容詞評定と有意な相関を持っていることが示された。ここで作成された尺度は、被験者をどれか1つの型に類型するのではなく、各愛着スタイルの強さをそれぞれ得点として表わすため、より柔軟な愛着の解釈が可能であった。

彼らの研究では、対人態度を測る対象の一つとして恋人が用いられたが、これは、恋人がもっとも強く愛着ス

スタイルを反映する対象であろうと推測されたからである。しかし、被験者に現在恋人がいない場合も考えられ、現在の具体的な対象としてとらえにくい可能性がある。そこで本研究では、態度評定の対象を現在の母親と親友とに設定し、追調査を実施した。

また、詫摩、戸田 (1988) で用いられた愛着スタイル尺度は、一般的な対人態度に関する被験者の自己評定にもとづいて現在の安着スタイルを調べるものである。愛着スタイル得点も対人態度もともに、同じ人が自分の対人態度に関連する尺度を評定して得られた結果であるため、愛着スタイル以外の変数によって相関が高くなってしまった可能性が否定できない。そこで本研究では、被験者の母親に、被験者の乳幼児期における母子関係を、回顧的に評定してもらうことにより愛着スタイルを測定し、対人態度との関係を調べた。これにより、青年の愛着スタイルと対人態度との関連を再確認し、乳幼児期の母子関係における愛着スタイルから、青年期の対人態度を予測する可能性を探った。

方 法

1) 測定用具

本人評定による愛着スタイル尺度 これは、詫摩、戸田 (1988) で作成されたものと同一の尺度である。尺度には、自分の一般的な対人態度について述べた18の項目文が含まれている (例:「私はわりあいになやすく人と親しくなる方だと思う。」、「人は、本当はいいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。」)。この項目文は、安定型、アンビバレント型、回避型のそれぞれの特徴を述べた文6つずつからなっている。評定者は各項目文について、自分にあてはまる度合を、「+3:非常にあてはまる」、「+2:かなりあてはまる」、「+1:ややあてはまる」、「0:どちらともいえない」、「-1:ややあてはまらない」、「-2:かなりあてはまらない」、「-3:全くあてはまらない」の7件法で評定する。

母親評定による愛着スタイル尺度 母親の評定によって子供の愛着スタイルを測定するために、まずAinsworth (1978) で記述されている、ストレンジシチュエーションでの乳児の行動から愛着スタイルを決定する際の行動リストの中から、各愛着型を示す特徴を選びだし、評定項目とした。その結果、表1に示すように、6つの場面での26の行動特徴が評定項目となった。評定者は、子供が0~1歳のとき、各場面で子供の様子がどうであったかを回顧して、あてはまるものすべてにマルをつける

表 1 母親評定による愛着スタイル尺度の評定項目

I.	買い物や用事で子供から離れるとき あなたの後をついてきた。(安定型) 泣いた。(アンビバレント型) 泣かなかった。(回避型)
II.	外出から帰って、子供のもとへ戻ったとき あなたを避けた。(回避型) あなたを無視した。(回避型) あなたから顔をそむけた。(回避型) あなたから離れた。(回避型) 泣くのをやめた。(安定型) あなたに近づいた。(安定型) あなたに抵抗した。(アンビバレント型)
III.	子供と一緒に遊ぶとき 喜んであなたと遊んだ。(安定型) あなたに抵抗した。(アンビバレント型) あなたと遊ぼうとするが、それは非常にあいまいであった。(アンビバレント型) あなたを避けた。(回避型)
IV.	子供を持ち上げたとき 持ち上げられることに折抵抗した。(アンビバレント型) 他のものを見ていた。(回避型) 無関心であった。(回避型) あなたにすがりついた。(安定型)
V.	子供を下ろそうとしたとき 下ろされることに激しく抵抗した。(安定型) 下ろされることに怒っているようで、あなたに抵抗した。(アンビバレント型) 身もだえした。(回避型) 無関心であった。(回避型)
VI.	見知らぬ人に対して 友好的であった。(安定型) 怒った。(アンビバレント型) 抵抗した。(アンビバレント型) 回避する傾向があった。(回避型)

注) () 内は、文に対応する愛着型を示す。

という方法で評定した。

現在の母親に対するイメージ評定尺度 この尺度は、訥摩、戸田 (1988) で用いられた尺度と同一のものであった。57 個の各形容詞が、現在の母親に対するイメージにどれくらいあてはまるかを、「+2: あてはまる」、「+1: 少しあてはまる」、「0: どちらともいえない」、「-1: 少しあてはまらない」、「-2: あてはまらない」の中から選ぶという 5 件法で評定された。

親友に対するイメージ評定尺度 この尺度は、現在の親友に対するイメージを評定する点以外は、現在の母親に対するイメージ評定尺度と同一のものであった。

2) 被験者

被験者は、慶應義塾大学で 7 つの心理学関連の講義のいずれかを受講している大学生 344 名 (男子 142 名、女子 202 名) であった。このうち、4 つの講義受講者 124

名 (男子 29 名、女子 95 名) については、母親評定による愛着スタイル尺度を実施した。

3) 調査期間

被験者本人による評定尺度記入は 1993 年 9 月 24 日～11 月 2 日の間におこなわれた。母親による評定は、1993 年 10 月 15 日～12 月 10 日の間におこなわれた。

4) 調査手続

被験者本人による評定尺度は、本人評定による愛着スタイル尺度、現在の母親に対するイメージ評定尺度、親友に対するイメージ評定尺度の順に一冊の質問紙にまとめられ、講義中に配布、記入、回収がおこなわれた。記入法の教示は、質問紙に記載するとともに口頭でも提示された。

母親評定による愛着スタイル尺度用紙は、他の尺度と一緒に配布し、被験者本人から母親に渡してもらった。

回収はその次の講義の時間におこなった。また、自宅通学ではない被験者については、調査期間中に自宅に帰る者についてのみ実施し、回収は郵送でおこなった。

結 果

1) 得点化の方法

本人評定による愛着スタイル ここでは、7 件法の選択肢の数値を、その項目文のあてはまりの程度を表わす間隔尺度の値として考え、点数としてそのまま用いた。そして、3 つの愛着型に対応する各 6 項目の値を合計し、それぞれ安定型得点、アンビバレント型得点、回避型得点とした。各得点がとりうる範囲は、-18~+18 である。

母親評定による愛着スタイル 表 1 に示されている I~VI の各場面ごとに点数化をおこなった。その場面の項目の中で、1 つの愛着型の項目にのみマルがついている場合はその愛着型を 1 点で他の型を 0 点とし、複数の愛着型の項目にわたってマルがついている場合はすべての愛着型を 0 点とした。得点は 0 か 1 で、その場面の中で同じ愛着型の項目が複数選ばれている場合にも 1 点だけが与えられた。

そして、6 つの場面を通して各愛着型の点数を合計し、それをそれぞれ、安定型得点、アンビバレント型得点、回避型得点とした。得点のとりうる範囲は、0~6 点である。

現在の母親に対する態度 ここでは、イメージ評定尺度の各形容詞について、5 つの選択肢の数値を、その形容詞のあてはまりの程度を表わす間隔尺度の値として考え、選ばれた選択肢の値をそのまま形容詞得点とした。

親友に対する態度 ここでも現在の母親に対する態度と同様に、選ばれた選択肢の値をそのまま形容詞得点とした。

2) 本人評定による愛着スタイルと対人態度の関係

被験者数 344 名の内、回答が不完全な被験者を除いた 305 名 (男子 125 名, 女子 180 名) の回答が分析された。被験者の年齢範囲は 18~26 歳, 平均年齢 19.2 歳であった。親友がいないと答えた被験者は、5 名 (男子 3 名, 女子 2 名) であった。

現在の母親に対するイメージの各形容詞得点と各愛着型得点の相関のうち、有意な値 ($p < .05$) だけを示したのが表 2 である。半分以上の相関が有意となっており、57 の形容詞得点のうち、3 つの愛着型得点のいずれとも

表 2 現在の母親に対するイメージの形容詞得点と本人評定による愛着型得点との相関

形容詞	愛着型			形容詞	愛着型		
	安定型	アンビバレント型	回避型		安定型	アンビバレント型	回避型
優しい	.178 **		-.139 *	冷たい	-.157 **	.128 *	.217 ***
うるさい			*	不安な	-.177 **	.257 ***	.152 **
愛情深い	.187 **		-.132	一貫した	.134 *	-.127 *	
丁寧な	.167 **			理解のある	.159 **		
干渉的な				暖かい	.232 ***		-.225 ***
上品な	.178 **			過敏な		.130 *	
押し付けがましい		.190 ***		正しい	.186 **		-.149 **
明るい	.182 **	-.188 ***	-.117 *	批判的な		.135 *	
世話好きな	.139 *			あてにならない	-.150 **	.157 **	.130 *
要求的な		.115 *		冷淡な	-.188 ***	.205 ***	.207 ***
愛すべき	.220 ***		-.187 **	安全な	.185 **	-.123 *	-.151 **
ユーモアのある	.234 ***	-.137 *	-.213 ***	頼りになる	.197 ***	-.152 **	-.187 **
人の良い	.175 **			疑い深い		.206 ***	
信頼できる	.205 ***	-.169 **	-.181 **	敏感な	.143 *		
不幸な	-.250 ***	.116 *	.179 **	公正な	.242 ***		-.167 **
硬い		.141 *		感受性の豊かな	.281 ***		
責任感のある	.171 **			落ち着いた	.222 ***	-.128 *	
嫉妬深い	-.139 *	.227 ***	.166 **	矛盾した		.173 **	
思いやりのある	.234 ***		-.189 ***	気まぐれな		.142 *	
鈍感な	-.265 ***			のろまな	-.185 **	.159 **	
弱々しい			.156 **	無責任な	-.214 ***	.172 **	.160 **
無関心な	-.182 **	.138 *	.169 **	不安定な	-.256 ***	.269 ***	.192 ***
受け入れてくれる	.237 ***	-.157 **	-.218 ***	厳格な			
不公平な	-.133 *	.158 **	.152 **	暗い	-.236 ***	.179 **	
好ましい	.211 ***		-.195 ***	愛想の良い	.162 **		
尊敬できる	.248 ***		-.130 *	柔軟な	.244 ***		-.134 *
拒否的な	-.128 *	.157 **	.170 **	安心できる	.226 ***		-.195 ***
強い	.163 **			感情的な		.141 *	
知的な	.177 **	-.154 **					

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表 3 親友に対するイメージの形容詞得点と本人評定による愛着型得点との相関

形容詞	愛着型			形容詞	愛着型		
	安定型	アンパレント型	回避型		安定型	アンパレント型	回避型
優しい	.216 ***		-.277 ***	冷たい	-.200 ***	.189 ***	.224 ***
うるさい		.139 *	.134 *	不安な	-.201 ***	.225 ***	.277 ***
愛情深い	.257 ***	-.134 *	-.180 **	一貫した			
丁寧な	.126 *		-.131 *	理解のある	.272 ***	-.123 *	-.204 ***
干渉的な			.183 **	暖かい	.320 ***	-.127 *	-.313 ***
上品な				過敏な			
押し付けがましい		.192 ***	.240 ***	正しい	.165 **	-.113 *	-.220 ***
明るい	.335 ***		-.257 ***	批判的な	-.234 **	.189 ***	.291 ***
世話好きな	.152 **		-.125 *	あてにならない	-.151 **	.198 ***	.208 ***
要求的な		.177 **	.117 *	冷淡な	-.179 **	.163 **	.341 ***
愛すべき	.272 ***		-.236 ***	安全な	.229 ***		-.212 ***
ユーモアのある	.289 ***		-.165 **	頼りになる	.218 ***		-.217 ***
人の良い	.233 ***	-.124 *	-.239 ***	疑い深い	-.144 *	.188 ***	.237 ***
信頼できる	.231 ***	-.128 *	-.165 **	敏感な			
不幸な	-.130 *	.132 *	.256 ***	公正な	.180 **	-.129 *	-.233 ***
硬い	-.120 *		.250 ***	感受性の豊かな	.219 ***		-.183 **
責任感のある	.120 *	-.130 *	-.164 **	落ち着いた			
嫉妬深い		.112 *	.139 *	矛盾した		.172 **	.242 ***
思いやりのある	.247 ***	-.128 *	-.211 ***	気まぐれな		.174 **	.161 **
鈍感な			.115 *	のろまな			.117 *
弱々しい	-.138 *	.161 **	.170 **	無責任な		.192 ***	.157 **
無関心な	-.237 ***	.191 ***	.257 ***	不安定な	-.173 **	.252 ***	.235 ***
受け入れてくれる	.285 ***		-.278 ***	厳格な			.146 *
不公平な	-.185 **		.243 ***	暗い	-.235 ***	.136 *	.273 ***
好ましい	.291 ***		-.284 ***	愛想の良い	.226 ***		-.127 *
尊敬できる	.148 **		-.225 ***	柔軟な	.229 ***		-.248 ***
拒否的な	-.183 **		.251 ***	安心できる	.254 ***	-.121 *	-.260 ***
強い				感情的な	.121 *		
知的な							

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表 4 現在の母親に対するイメージの形容詞得点と母親評定による愛着型得点との相関

形容詞	愛着型			形容詞	愛着型		
	安定型	アンパレント型	回避型		安定型	アンパレント型	回避型
優しい				冷たい	-.270 *	.251 *	
うるさい		.235 *		不安な	-.233 *	.231 *	
愛情深い				一貫した			
丁寧な				理解のある			
干渉的な				暖かい			
上品な				過敏な			
押し付けがましい				正しい			
明るい	.379 ***			批判的な			
世話好きな	.301 **			あてにならない			
要求的な		.280 *		冷淡な	-.277 *	.254 *	
愛すべき				安全な			
ユーモアのある				頼りになる	.289 *		
人の良い				疑い深い			
信頼できる				敏感な			
不幸な	-.258 *			公正な			
硬い				感受性の豊かな	.248 *		
責任感のある				落ち着いた			
嫉妬深い				矛盾した			
思いやりのある				気まぐれな			
鈍感な				のろまな			
弱々しい				無責任な			
無関心な				不安定な			
受け入れてくれる				厳格な			
不公平な		.239 *		暗い	-.244 *		
好ましい				愛想の良い			
尊敬できる				柔軟な	.265 *		
拒否的な	-.236 *			安心できる	.336 **		
強い				感情的な			
知的な							

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表 5 親友に対するイメージの形容詞得点と母親評定による愛着型得点との相関

形容詞	愛着型			形容詞	愛着型		
	安定型	アンビバレント型	回避型		安定型	アンビバレント型	回避型
優しい				冷たい			
うるさい				不安な	- .377 ***		.309 **
愛情深い				一貫した			
丁寧な				理解のある			
干渉的な				暖かい			
上品な			-.243 *	過敏な			
押し付けがましい				正しい			
明るい				批判的な			
世話好きな				あてにならない			
要求的な				冷淡な			
愛すべき				安全な			
ユーモアのある				頼りになる			
人の良い				疑い深い			
信頼できる				敏感な			
不幸な				公正な	.246 *		
硬い				感受性の豊かな			
責任感のある				落ち着いた			
嫉妬深い				矛盾した	-.310 **		.316 **
思いやりのある				気まぐれな			
鈍感な				のろまな	-.236 *		
弱々しい				無責任な			
無関心な				不安定な			
受け入れてくれる				厳格な			
不公平な				暗い			
好ましい				愛想の良い			
尊敬できる				柔軟な			
拒否的な				安心できる			
強い				感情的な			.274 *
知的な							

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

相関が有意でないのは、「うるさい」、「干渉的な」、「厳格な」の3つのみであった。また、有意な相関について見た場合、安定型得点の相関と他の2つの愛着型得点の相関係数の符号が必ず逆になっており、アンビバレント型と回避型の相関係数の符号が必ず同じであることがわかる。

表2と同様にして、親友に対するイメージの形容詞得点と愛着型得点の関係が表3に示されている。ここでも半分以上の相関が有意であった。どの愛着得点とも有意な相関がなかった形容詞は、「上品な」、「強い」、「知的な」、「一貫した」、「敏感な」、「落ち着いた」の6つであった。安定型得点の相関係数とアンビバレント型得点、回避型得点の相関係数はここでも必ず符号が逆になっていた。

現在の母親に対するイメージでの相関と親友に対するイメージでの相関とを比較すると、相関の高い箇所はある程度一致しており、相関係数の符号が逆になっている箇所がないことがわかる。

3) 母親評定による愛着スタイルと対人態度の関係

母親による評定用紙を配布した124名のうち、未回収と不完全な回答を除いた74名の回答が分析された。母

親の年齢範囲は38~57歳、平均年齢は45.8歳であった。

現在の母親に対するイメージの各形容詞得点と各愛着型得点の相関のうち、有意な値($p<.05$)だけを示したのが表4である。本人評定による愛着スタイルの場合と比べると、有意な相関のある箇所が少なく、回避型得点と有意な相関のある形容詞はまったくない。しかし、「明るい」、「世話好きな」、「安心できる」のように、安定型得点との相関が高い形容詞も存在した。

表4と同様にして、親友に対するイメージの形容詞得点と愛着型得点の関係が表5に示されている。ここでも本人評定による愛着スタイルの場合と比べると、有意な相関のある箇所は少なかったが、回避型得点と有意な相関のある形容詞は4つあった。一方、アンビバレント型得点と有意な相関のある形容詞は見られなかった。「不安な」、「矛盾した」と安定型得点、回避型得点の相関はどれも $p<.01$ で有意であった。

現在の母親に対するイメージでの相関と親友に対するイメージでの相関とを比較してみると、現在の母親に対するイメージの方が有意な相関が多く見られる。また、ともに相関が有意な箇所は「不安な」と安定型得点

の組み合わせだけであり、両者が愛着型得点と関連する部分が異なることを示している。

4) 本人評定による愛着スタイルと母親評定による愛着スタイルとの関係

母親による評定をおこなった被験者について、本人評定による愛着型得点と母親評定による愛着型得点との相関をみると、安定型では $r = -.022$ 、アンビバレント型では $r = .075$ 、回避型では $r = .077$ であり、 $p < .05$ で有意なものはない。

考 察

現在親友がいない被験者が5名と少なかったことは、対人態度を測る際の対象として親友が適切であることを示している。

本人評定による愛着スタイルと対人態度との関係では、愛着型得点と形容詞得点の有意な相関が多数見られた。また、現在の母親に対するイメージにおいても親友に対するイメージにおいても相関のしかたに大きな差異はなかった。これは先行研究の結果と一致しており、この尺度による愛着スタイルと対人態度との密接な関係が安定していることが確かめられた。しかし、評定者が同じであること、両方とも対人関係に関連する評定にもとづいていることを考慮すると、ここでの結果が愛着とは関係のない変数の効果によってもたらされたものである可能性は依然として残っている。

安定型得点と他の2つの愛着型得点とで対人態度との相関の方向が反対であったことは、この尺度での愛着型の分類が安定、不安定の2種類であっても、同様の結果がある程度は得られるであろうことを示唆していると考えられる。

母親評定による愛着スタイルと対人態度との関係では、本人評定の場合に比べ、有意な相関のある形容詞と愛着型の組み合わせが少なかった。それでも、その数は偶然に有意な値が出現する期待度数よりもずっと多く、この尺度から出された愛着スタイルと対人態度との間に何らかの関係性が存在することは示されている。愛着スタイル尺度と対人態度尺度で、評定者が異なり、しかも評定している対象が「現在の他者に対するイメージ」と「過去の子供の行動特徴」という全く異なるものであることを考慮すると、この2つの間に関連が見られたということは、注目し値することである。

本人評定の場合と異なり、母親評定では、現在の母親に対するイメージと親友に対するイメージとで、愛着型得点と相関する形容詞が異なっていた。この説明として

考えられるのは、まず、本来は対人態度と愛着スタイルの関係のしかたは態度を測る対象によって異なっているのだが、本人評定では先に指摘したような評定法の類似による愛着以外の変数の効果が強いために、その差異が目立たなかったのではないかという可能性である。しかし一方、ここでの愛着スタイルは母親による母子関係の評定をもとにしているため、母親に対するイメージにおいてのみ独特の関係性を示したということも考えられる。

本人評定による愛着型得点と母親評定による愛着型得点との間に相関関係がないことについては、一方が現在の愛着スタイルを測定しているのに対し、一方が乳児期の愛着スタイルを測定しているために、乳児期から現在までに愛着スタイル自体が変化したためではないかと考えられる。また、両尺度ともストレンジシチュエーションでの愛着型分類に対応した得点を算出しようとしているが、実際には両者の愛着型得点が異なる愛着特性を表現している可能性もある。

本研究で用いた母親評定による愛着スタイル尺度については、方法論上いくつかの問題点が挙げられる。まず、回顧法を用いているため、母親が本当に子供の乳児期の行動について評定しているかが明確でない点が挙げられる。次に、得点化の方法が適切かどうかの保証がなく、特に得点を間隔尺度として扱うことには疑問がある。最後は、算出された各愛着型得点が、本当に安定型、アンビバレント型、回避型の傾向を反映しているかどうかは確かめられていない点である。もしこうした問題点が解決されて回顧法による愛着スタイル尺度が確立されれば、愛着研究における有効な用具となるはずである。

文 献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978): *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bowlby, J. (1969): *Attachment and loss, Vol. 1: Attachment*. The Hogarth Press.
- Bowlby, J. (1973): *Attachment and loss, Vol. 2: Separation*. The Hogarth Press.
- Bowlby, J. (1979): *The making and breaking of affectional bonds*. Tavistock.
- Bowlby, J. (1980): *Attachment and loss, Vol. 3: Loss*. The Hogarth Press.
- Bretherton, I. (1992): The origins of attachment theory: John Bowlby and Mary Ainsworth. *Developmental Psychology*, 28, 759-775.
- Fonagy, P., Steele, H., & Steele, M. (1991):

Maternal representations of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, 62, 891-905.

詫摩武俊・戸田弘二 (1988): 愛着理論からみた青年期の対人態度 —成人版愛着スタイル尺度作成の試み—, 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.